

聲一第還歸

特251

535

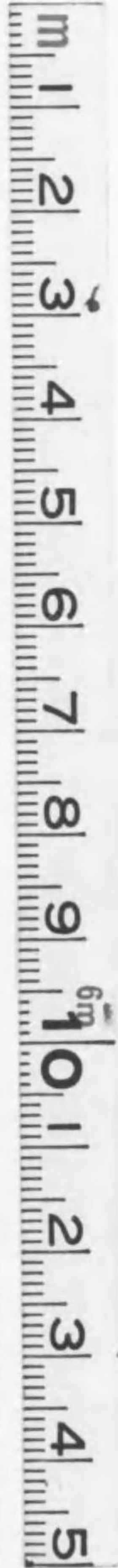
大日本青年黨統領
陸軍砲兵大佐

橋本欣五郎述

日本の行く道

部下の尊き犠牲に泣き英靈に誓ふ
二線部隊長の血の叫びを聞け!!

十銭



始



251
57

略 規

- 一、本會ハ富強日本協會ト稱シ本部ヲ東京ニ置ク
- 二、本會ハ政治經濟科學宗教、文藝思想ソノ他社會各般ノ研究ニツトメ、更ニ會員相互ノ親睦交誼ヲ圖リ偏セズ黨セズ豐富ナル知識ヲ啓培シ以ツテ各自ノ人格ノ向上ヲ計リ、物ト心ノ兩面ニ於テ皇國日本ヲ富強タラシメン爲メニ一致協力スルヲ以ツテ目的トス
- 三、本會ハ左ノ會員ヲ以ツテ組織ス
 - イ、正會員 一ヶ年會費金五圓ヲ負擔スル者
 - ロ、特別會員 一ヶ年會費金十二圓以上ヲ負擔スル者及ビ本會ノ推薦スル者
 - ハ、維持會員 本會ノ事業ニ共鳴シ贊助費トシテ年額金五拾圓以上ヲ齎出スル者
- 四、本會ニハ會長一名、顧問、相談役、理事、評議員各々若干名ヲ置キ理事中ニ理事長一名ヲ置ク
- 五、本會ハ右ノ目的ヲ達成スル爲メ左ノ事業ヲ行フ
 - イ、月刊雜誌『富強日本』及ビソノ他パンフレットヲ隨時發行ス
 - ロ、毎月一回名士及ビ新知識ヲ招聘シ研究會ヲ開ク外隨時座談會、懇談會、見學會等ヲ開ク
 - ハ、公會ノ大講演會、映畫會ソノ他必要ノ事業ヲ行フ
- 六、本協會ハ會員ノ依頼ニ應ジ各種問題ノ原稿執筆並ニパンフレット、リーフレット等ノ作製、講演會ニ對シ講師派遣ノ依頼ニ應ズ
- 七、本會ノ維持ハ會費並ニ寄附金ニヨル

東京市神田區神保町三ノ二三

富 強 日 本 協 會

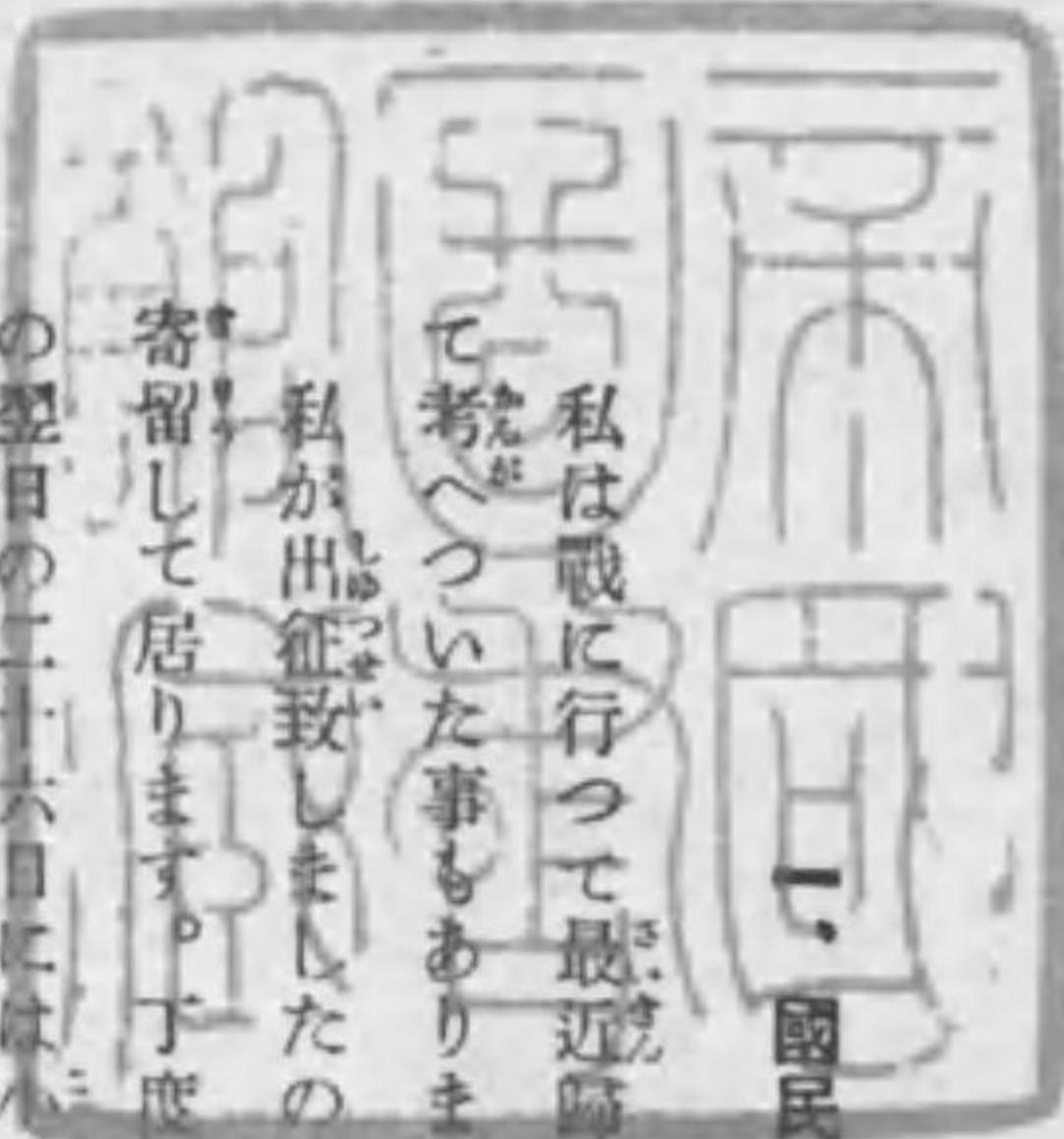
電話九段(33)三二二七番

日本の行く途

大日本青年黨統領
陸軍砲兵大佐

橋 本 欣 五 郎

(六月二十日、レインボーグリルに於て)
本會特別研究會第二十一回講演



一、國民は總動員體制をとれ

私は戦に行つて最近歸つた者であります。戦から得た處の經驗等から考へまして内地の狀況等に付て考へつた事もありまして、多少御話したいと思ひます。

私が出征致しましたのは一昨年(一九四一年)の夏でありました。私は元來生れは九州の者であります。東京に寄留して居ります。丁度一昨年(一九四一年)の八月二十五日でありましたが午前十時に召集令狀が参りました。其の翌日の二十六日には小倉に來いと云ふ命令であります。何分にもそれに間に合ふ爲には二十五日の三時の東京發特急に乗らなければ間に合はないと云ふ狀況であります。甚だ忙しい五時間でありました

日本の行く途



が、何とか片付けてやつと間に合ひました。私が僅か五時間で身の廻りの事を片付けて召集に應じた
と云ふ事は何等珍らしい事はないのでありますが、丁度事件が起りました時に〇〇の部隊ですが、事
件勃發の其の日に出勤命令を受けまして、其の夕方に汽車に乗込んで膨大なる處の部隊が出征したの
であります。

聯隊の如きは兵が〇〇名にも垂々とし、彈丸、大砲、馬〇〇、それに糧食等々がありますが、此の
膨大なる處の諸隊が僅か一日にして出勤したと云ふ事は餘程吾々は國民として考へねばならない事
であらうと思ふのであります。それは軍隊は日頃用意して居るから出来るのが當り前で出来ないのがお
かしいと言つて了へばそれまでであります。今の世界の状況を見ますれば何時如何なる事が突發す
るか分らんと云ふ國際情勢であります。此の時に於て國民はいざと云ふ場合に當れば直に各自が其の
持場持場に就く事が出来るかと云ふ事にして置かなければ其の間に合はないのであります。

二、斷乎として行へば途開かれる

此處で話は別になるのでありますが、今歐羅巴に於て、獨逸、伊太利が英國に對して大層力んで居
りますが、武力に於てはどんなことをしても獨、伊側は英、佛側に對して敵ふ道理がないのでありま

す。ロシアを率ひて居りますので、之は獨逸、伊太利に取つては相當の重荷であります。それではい
ざと云ふ場合に獨、伊はどうするかと云ふと、必ずや、私は申して置きますが不意討ちであります。



福岡縣門司市の出身、陸軍士官學校第
二十三期卒業の砲兵大佐。陸軍大學卒業
後參謀本部に入り後ち歐洲各國に大使館
附武官として駐在、昭和五年歸國、參謀
本部ロシヤ班長となり滿洲事變後は、北
滿の特務機關長として活躍、昭和十一年
三島重砲兵聯隊長となりかの二・二六事
件後現役を退き大日本青年黨を結成し革
進黨の第一線に立ちしも支那事變勃發
するや、直ちに召集せられて戦線に馳驅
すること一年八ヶ月、去る三月歸還召集
解除となり難に結成せる大日本青年黨統
領として國家革新運動に東奔西走中。

何等外交々
涉が今や決
裂せざる中
に獨逸、伊
太利と云ふ
ものは全軍
の飛行機を
以て倫敦、
巴里を空襲

し、工業地帯を一時に爆破する事は明白であります。其の爆撃も單なる炸裂に依る爆薬でなくて現在
秘密裡に研究して居るもので最初の一瞬に目潰しをしてふと云ふ事を必ずやります。等々を考へて
此の日支事變に僅かの一日にして膨大なる部隊が出動したと云ふ事を考へて、國民は餘程心根を据え

で置かんと不可んのではないかと私は思ひます。

さう言ひますと、大體橋本と云ふ男は相當亂暴な奴で過激の事を言ふと、直ぐ相當の見識者が申されまするけれども、さうして直ぐ言ふて曰く、風俗習慣、民族等があるからさう易くは行くものではないと。併し私は敢て言ひます。斷乎として行ふ前に於ては何等出来ないものはないのであります。例へば彼のケマルの如きはあの土耳其人の封建的の服裝を四十六時間にして叩き直し、文字を書くのも横書に直させる、一夫多妻を一夫一妻にしてつた。抑々迅速果敢の斷乎たる決心を以て一刀兩斷に打割つたのであります。又ロシアにあれだけ濕つて居つた宗教を斷然能めて宗教は阿片なりと云ふが如き、又此の頃の獨逸等がチエツコを取りオーストリーを取りすると云ふ有様の如き、伊太利がエチオピアに出征した如き等々を考へますれば、餘りにも吾々日本人は舊套に染んでつて最早脱出する事が出来ない有様にあるのではないかと思ふのであります。又私がさう云ふと、何日本には世界に無比の日本精神と云ふものがある、大和魂がある、或は何ちや彼ちやと言ふて頻りに申述べられますけれども、今はそんなものに安心する時代ではありません。

何時ぞやヒットラー・ユーゲントが日本に来て日本の青年等を見て、或人がそれに感想を聞いた時にその曰く、「實に日本は立派なものです、獨逸よりうんと宜い、併し一つ足りないものがある、

吾々獨逸人はもう生活のどん底に落ち切つた、其のどん底から烈々として引上げて行く處の氣魄が青年に有るが、併し日本の青年は最早満足國たる青年と見える、此の點が違ふのみである」と申したさうであります。餘程此の言は味つて聽くべき事と私は思ふのであります。

三、英國は第三國に非ずして敵國である

扱て私は小倉で私の部隊を編成しまして、朝鮮を通過し奉天を通り山海關を越えて北京の南、豐臺に下車致しました。蘆溝橋を抜けて石家莊と云ふ所で一戦したのであります。石家莊の戦が難なくすみますと直に橋本の部隊は後に退れと云ふ事で、例の如く貨車に恰も荷物の如くに行方も知らずに乗せられたのであります。さうして着いた所は大連であります。大連の港には船が待つてゐる、更に之に乗せられて大連の埠頭を出しましたがまだ何處へ行くか分らない、それで私は船長に向ひまして何處に行くかと聞いた處が船長も分らないと云ふ、分らないでは不可んぢやないかと云ふと、實は山東角の東北の北緯何度、東經何度と云ふ所に行くと云ふ話であります。さうして山東角に参りました時に船が南に廻つて了つた。其の時分に私は考へました、此の調子で行くならばひよつとすると廣東に行くのぢやないか、之は却々陸軍も政府も其の人あり、今にして廣東に行くならば此の事變は速

に片附くであらうと斯う考へたのであります。それが一昨年さくねんの十月頃でありました。處が豈計あははからんや勿論廣東ではありませんでした。大體廣東を占領せんりやうしましたのが去年の暮くれです。最早蔣介石にも、英國にも此の事變に屬する抗毒素かうどくそが出来たと思はれる頃、即ち去年の暮頃に初めて廣東、海南島を叩いたのであります。之が効果が薄いと云ふ事は明瞭めいりやうであります。若し私が山東角を廻つたときに、即ち一昨年さくねんの暮、廣東、海南島を取つて居つたならば、之はたまらんと英國が思ふ、だからして此の事變は直ちに片附いて居つたかも知れません。

何分にも最近に於ける處の日本の政府等の政策は萬事手遅れ々々々と打たれて居るのであります。又手遅れ々々々と打たれるが故に支那問題は却々片附かん、片附かんかたつきと云ふ事は宜しいですが、後手が打たれる爲には其の結果として、我が忠勇なる兵は多數犠牲になつて居るのであります。心此處に及んで政策を實行して戴き度いと私は常に兵に代つて思ふ譯であります。何故後手に行くかと云ふ事を能く考へて見ますと、之は一に英國に遠慮をして居ると云ふ事に存して居ります。軍事學上廣東を取るが如きは實に易々たるものであります。今後それより南の色々の所を取るにも軍事學上から見れば之亦實に易々たる事、朝飯前あさひまへであります。易々たる事は此の廣東の占領、それを御覽ごらんになれば明かであります。此の易々たる事を後手で打つて行く所以のものは偏へに英國に對して遠慮して居

るからであります。爲政者等に斷然英國をやつつけると云ふ考があつたならば、もう少し壯大なる事が決行せられて手際良てぎざらく此の事變は解決する事と思ひます。一體に仕事をせんとする時に餘り小さい所に目標を決めてやる事は金惜しみの一文なしになる事でありませぬ。膨大なる全貌ぜんぼうを看取つて之を達成する爲に斯くやると云ふ政策を樹てる。それを今の日本は望んで居るのであります。處がそれに反して何事も場當りく、外交に於ても、經濟に於ても、政治に於ても、斯の如く場當り主義でやつて居る悲しむべき状態が現在の日本其の儘と考へるのであります。

四、戦争は詩である

さうして山東角を南に廻つて行きまして、丁度上海沖に來たと思ふ頃又船は東に廻つて行きました。一夜明けて見ますと船が、實に山紫水明の山々に取圍まれた處の漁村に入つて居りました。どうも之は日本の浦らしいと思ひましたが、私の部下の一人が突然「部隊長殿之は私の村であります」と云ふ成程之は〇〇港附近の一漁村でありましたが、而も私共より先きに數十隻の運送船が居つたのであります。中には潜水艦も居ると云ふやうな有様であります。其のうちに日が經つて五隻、六隻と運送船が集つて來る、此の日本の田舎の漁村に〇〇噸級の運送船が〇に垂々とする位集つて居る。

其の景色は實に尨大な優美な、さうして又壯觀なものでありました。私は戦は詩である、戦はポエーヂである、と此の時につく／＼考へたのであります。

茲で話は別になりますが、此の頃の詩人、歌人等の歌等を見ますれば實にこみ／＼したもので單なる技術に走つて居るのであります。之等の雄渾なる詩想が湧いて居らない。私はそれ等の詩人に對して、此の戦は詩である、此の雄大さを見る、斯う叫び度いと思ひます。此の頃の歌謡曲其の他はあまりすけれども、之を歌つて壯嚴なる處の詩想が起るべき作詩も作曲も私は一つとして見出し得ない實に憐むべき状態であつて、之即ち國民心理の反映であると私は斷然思つて居ります。

さう斯うして居る中に○隻近くの運送船が集りました、それを三縱陣に組みまして前後左右を軍艦に護られて西へ西へと進んで行つたのであります。天氣晴朗にして波高しと云ふ有様でありました。私は甲板の上に立つて居りました。其の時の私の氣持は男性の有すべき凡有性格の其の全部を私の身一つ、總身に受けたと云ふ心境でありました。實に悠々迫らず雄大なる氣魄を私の全身に感得し得たのであります。其の時に私は思ひました、自分も此の位の氣持ちを一生涯續けて居つたならば世界に於ける處の如何なる偉大なる事業も決行し得ざる事なしと考へたのであります。勿論斯の如き雄大なる氣を常時保持して行くと云ふ事は難しい事でありすけれども、今時代は吾々國民に對して、私が

此の甲板上に感得したが如き雄大なる氣風を抱く事を要求してゐます。又全國民が持つて行かなければならない處の現下の日本の状態ではないかと私は考へて居るのであります。

五、事變解決の鍵は攘英にある

斯くして私は杭州灣に着きました。杭州灣は御存じでもありませんが潮の満ち干が非常に激しい所であります。一度潮の満ちる時に杭州灣の錢塘江を驅け上る、それが二丈、三丈の瀑布の如くになつて川上にあつて行くのであります。其の姿が餘りに壯觀である爲に上海在住の外國人邊りが特別列車を仕立て、見物に來ると云ふ、それ位凄いものであります。處が其の反對に引潮の時は一里以上も砂濱がすつと出来る、満つれば岸邊迄打寄せる、此の場所での敵前上陸と云ふものは却々難しい、而も岸邊にはすらりとトーチカが並んで作つてある、淺瀬迄軍用ランチで行つて直に此のトーチカに肉迫する、満つれば潮が來る、之をどうしてもやらなければならんと云ふので兵の苦勞も並大抵ではありませぬ。當時杭州灣の對岸は「炎々として天を焦さんばかりに燃えて居る」其の間に翻翻として日章旗が翻つて居る、杭州灣には運送船○○隻軍艦あり驅逐艇ありと云ふ有様で、之亦實に壯大なる一つの詩であり、ポエーヂでありました。之が杭州灣敵前上陸の大體の光景であります。それで私は其

處に参りましたけれども陸の方から通信が來まして、陸の方は全く道がない泥田である到底橋本の如き野戦重砲兵が上るべき道がない、仕方がないから上海に舞戻つて上陸し直せと云ふ事でありましたから、再び上海に参りました。當時上海は、吳淞の港の如きは猫の食つた魚の骨の如き觀を呈し、又中心地たる南市の如きは炎々として燃え上つて居る。其の對岸の浦東地區も亦物凄しい火が上つて居る、其の火焰が夜の如きは天に冲すると云ふばかり、其の中にあつて英佛租界の五階建、六階建の建物がそれに照し出されて實に悽慘の光景を呈して居りました。さう云ふ状況の下に私は上海に上陸したのであります。それから私は杭州灣上陸部隊に後から追付かねばならない。それに追付く爲には上海郊外に中山路と云ふ環狀線道路が作つてあります。三四十間幅の大きな道路であります。此の環狀線道路たる中山路を横切つて、彼の戰鬪で有名であつた所の蘇州河が流れて居ります。此の蘇州河の向側、對岸に日本の豊田紡績と云ふ赤練瓦の工場があります。此の工場は英國の租界から懸け離れる事僅かに道一つと云ふ有様であります。それで其の豊田紡績は大體英國の工部局側で守備するから宜しいと云ふ譯で、日本は其の守備をしなくて殊更に手を引いたのであります。處が豈計らんや英國の此の工部局は此の豊田紡績に支那の兵隊を押込んで了つたのであります。ですから之等を蘇州河を渡つて攻撃する際には日本の豊田紡績が支那軍の爲に一大鐵壁、一大障壁となつたのでありますから、我兵の

損害も非常に多かつた爲に、幾多の犠牲を拂つたのであります。私が蘇州河を通ります時には豊田紡績は既に我有に歸して居りましたけれども、其處に立つて居りました兵が「部隊長殿、私の戦友は此の蘇州河を渡る時此の豊田紡績の所にありました大トーチカから撃たれて大勢戦死を致しました。私は英國を敵國と思ひ度くはありません、併し吾々は將に英國は敵國であると思ふ」と涙を流して懇へたのであります。私は英國が武器を蒋介石に與へて其の武器に依つて我が忠勇なる戦友が殺されるに於ては最早や之は第三國ではなくて將に敵國であると斷言するのであります。

英國を敵國でない第三國であると云ふ考があるが爲に萬事此頃の判斷と云ふものは間違を生じて居ります。例へば英國と手を握つて此の事件を片付けやうと云ふ連中が堂々として此の東京に充滿して居ります。英國と手を握つて此の事件を解決したと云ふ事は、神武以來未曾で我が帝國の歴史に於てはないのであります。又此の敵國と手を結んで事變を解決したとするならば、其の敵國の彈丸に依つて死んで居る處の我が忠勇なる兵は浮べれないのであります。のみならず現在戦地に於て戦つて居る處の兵隊其のものは、敵國たる處の英國と話を着けて此の事件を解決したとするならば非常に悲しむであります。而も其の積りたる、累積せる結果は如何なる事件が起るかと云ふ事は之を

保障し得ざるものがあると私は思ふのであります。もう少し此の英國の爲に忠勇なる兵の血が出て居ると云ふ事を頭に置いて戴かないと色々な不祥事件が必ず惹起する事は間違ひないと私は思ふのであります。

此處で話は又少し横の方に參るかも知れませんが、現在天津に租界問題が起つて居ります。それで此の租界問題の意義は如何なる所にあるかと斯う申しますれば、抑々支那事變は最早膠着状態に達して最早解決の望がない位に、達して居ります。だからして政府と雖も、軍部と雖も何處迄軍事行動をやつたならば、此の事件が片附くのであると云ふ事を明白に言へない、又吾々としても何處迄行つたら宜いかと云ふ事は言へないのであります。併乍ら此の支那から英國を叩き出したならば此の事變が解決すると云ふ事は私は斷然言ひ得るのであります。もうこんな事は理由を一々説明する必要はない。常識でそれは明瞭であります。だからして政府としては此の事變を解決するにはどうしても英國を叩き出す必要がある。斯う云ふ事を云ふ必要があるのでありますけれども、却々それを言ひ得ない状態にある政府者であります。其の觀點よりして支那問題の解決が膠着状態に達して居る、之を解決するには支那を英國の手から引離す、つまり英國を叩き出すのである、と云ふのは理論明白であるけれども今の政府當局は之を明白に言切れない。

六、天津事件を攘英遂行の口火たらしめよ

此の秋に當つて此の天津事件が起つた、あの事件を見ると國民の敵愾心が英國に對してずつと上つて来る、英國は不都合な奴である、不都合千萬の奴であると云ふ事になりますと、政府も國民の聲に負けては不可んと云ふので却々天津租界の包圍を解かないと云ふ譯で、國民の熱が昂れば已むを得ず政府がそれに従つて来ると云ふ、持ちつ持たれつの姿で排英運動が展開し、之がやがては上海にも香港にも進むと云ふ事で、始めて此の天津事件は有意義である。且支那事變を解決する處の一つの小さい端緒であると云ふ事が言へるのであります。其處に於て天津事件の意義があると思ふのであります。單なる四名の犯人を引渡すと云ふやうな事だけではない。根本に於て英國を支那から叩き出さなければならぬと思ひます。

英國を支那より手を引かず、斯う云ふことにならねばならぬ、私はこの際、勿論局地問題として片付けるのは宜いが、英國は如何なることをしても、我が日本の政府は斯く決心してゐるのであるといふ、確固たる氣持を持たないでアヤフヤに事を處したならば、この天津租界問題と雖も英國に舐められてしまふのであります、この點吾々は政府を監督し鞭撻し、さうして肚を据えさせるといふことに

しなくてはならない。支那事變を解決するがために私は斯く言ひたいのであります。

七、自給自足の國防國家體制を確立せよ

この英國を斷然叩くべきや、或は英國と手を握るべきやの境目はどこに存してゐるか、吾々はボン
ドに對して圓が下つても構はない、斷乎として自給自足でやるといふのが、或は何とかして圓の値を
保つて行つて向ふから物を買ふて來なければならぬのか、といふことに分れ目が存してゐるのであ
ります、最早一億の金、或は二億の金を持つて行つたところで、五百億も持つてゐる英國に向つて、
必要なる機關車を、自動車、何々を賣れといふても、賣らないであらうことは目の邊りに國際情勢
上見え透いてゐる、この際私は石にかじりついても、日本は斷然自給自足で行くといふ決心の肚を決
めなければならぬといふことは考へてゐる、經濟家は各種のことを申します、それは一應の理窟もありま
せう、併しながら私は自給自足で行くといふ肚で、國民總立となつて行けば何等の心配もないと思ふ
のであります、國家の危機を救ふときに、算盤をはじいてばかりはいられない斷乎としてやるところ
に浮ぶ瀬がある、然るに事實は今國家は、英國と手を握つてこの經濟状態も恢復するといふのと、斷
乎として自給自足で行くといふのと、二派に分裂してゐるのであります、これに意外なる争闘が卷起

つて参ります、だから私は英國を叩けと申しますけれども、その叩くにはこの國家の機構を自給自足
に立ててかゝるといふことに、根本的に頭を立て、英國を叩くといふことにならねばならぬ、唯勢
ひをつけたばかりでは駄目である、さてさう云ふことを考へたときに、國家の機構宜しきやといふこ
とは、皆様ずつと御考へになれば、今の状態では宜しくないといふ御考へになること、私は思ふのであ
ります。

八、戦場の勞苦を思へ

さう云ふ風にして私は豊田紡を通つて南京へくと進んだのであります、當時の進軍状態は、敵が
東に向つて防禦すれば西より進み、南より防禦すれば北へ向つて進むといふやうに、恰かも成吉思汗
が荒野に向つて進軍したといふやうな状態でありませう、行軍と申しますれば、四列縦隊でも作つて、
大砲を挽いて行くやうに思はれますが、決してさうではありませぬ、當時一昨年の暮ですから、寒風
凜烈、骨肉も氷るといつた太湖嵐である、加ふるに連日の降雨で、道は泥濘その極に達して實に膝を
没するといふ有様である、兵隊も殆んど年寄りばかりなので、十貫匁もある背囊を五十里も六十里も
背負つて歩くには骨が折れます、で、牛に載せて引張るもの、人力車に積んで引張るもの、中には乳母

車まで引張つて来て、背囊から鐵砲まで載せるといふ有様、その中には傳家の寶刀三尺もあるやうな大きな日本刀を背にしてゐる者もあり、まるで武者修行のやうな有様と云はうか、百鬼夜行と云はうかの有様で、諸軍打揃ふて南京へ／＼と進んだのであります、その行軍途中に私は思はざる涙をぬぐふたことがあります、それは體格は余り宜しからざる相當の年の特務兵が、膝を没する泥濘の中、馬も人も全くの泥人形となつて、何物もない所を通つて行く、曉て夕暮が迫つて來たが、憩ふ所とともない、そのうちに飯盒を開いて飯を食ふ、その中を見ると焦げついたやうな南京米のボロ／＼した飯に、支那のナラ漬が一つ入つてゐる切りである、それを食はんとすれば、泥塗れになつてゐるところの鐵兜から雨の霏が飯盒の中にどん／＼落ち込むのである、それを恬然として食べてゐる、その姿を見た私は、その特務兵から御光が射してゐるとしか思はれません、この特務兵のみならず、みんながみんな君國のために黙々として活動してゐるのであります、斯う云ふ風にして行軍しまして、さうして泥の中で幾夜となく立ん棒をして暮したのであります、或る夜であります、毎夜々々露營ばかりして居られませんか、付近の部落に入つて宿舎を取りました、さうすると先づ第一に薪が要る、けれども何もものもない、で手つ取り早いのは机の抽斗、箆筒の抽斗といふ有様でありましたから、第一日目に宿つた軍隊が、それを燃すから、次の軍隊が泊れば、今度は箆筒や机が、次いで腰掛がと

いふやうに、みんな薪とされてしまふ、あとから泊つた軍隊は何を燃すかと云へば、家の柱あるのみ、この柱もしば／＼兵が泊つて、出發に際して消すことを忘れて行くために火を發する、將に戦火と申しませう、日本軍の通過するところ、至るところの村といふ村、街といふ街は、焰々として燃え上り、黒煙天に沖するの有様であります、さうして付近には住民は一人として居らず、全部子供を背負ひ、妻を連れて山奥へ逃げ隠れしてゐるのであります、唯残つてゐるのは七十、八十になる老人である、爺さんや婆さんといふのは、自己の家戀しさの餘りその村に残つてゐるといふ有様、その七十、八十の爺さん婆さんが泥田の中で、自己の家が焰々と燃え上つてゐるのを、悄然として眺め、涙ぐんでゐる姿をしば／＼私は見たのであります、そのとき私は、國家はどうしても敗戦國になつてはいけない、國家あつての個人である、日頃税金が高いの何のと言つてゐるけれども、一朝國家が減ぶことにならば何物もない、もう少し心根をすえて國民を教育しなければならぬ、その心持で居らねばならぬ、といふことを、その涙潸然として泣きつゝある老人を見て私は痛く感じた次第であります。

九、英艦レディバードを一撃す

斯う云ふやうな状態で私共は南京に向つて進攻したのであります、私はその一番左の部隊に配屬

されました。その左の部隊はどこをとるかといふと蕪湖、揚子江の蕪湖邊りの河下に沿ふて南京に來た部隊であります、丁度蕪湖を占領致しまして、南京に向ひ、南京の手前約六、七里の所に宿營を致します、丁度南京陥落二日前のことであり、突如として夜中に命令が下つた——數萬の支那兵が運送船、ジャンク、凡ゆる船に乗つて河上に逃げつゝあるから、橋本は蕪湖に向つて進撃しろといふ命令だ、さう云ふわけで私は、蕪湖の五階建の税關の橋上に立ち、河邊に大砲を列べて電話を引いたのであります。そのうちに夜も明け、時間が経つて霧が霽れる、蕪湖より下流約三千米のところに、運送船が三隻ある、五千噸級の船であります、その真ん中に眞つ白い船が一ぱい居つて、四はいといふ有様、これが敗殘兵らしいものを陸上にランチで送つてゐる、これは不都合な奴だと思つた、けれども間違つてはいけないから、副官を先にやつて見届けさせ、間違ひがなかつたらハンカチを振ることにしてゐた。案の定間違ひはない、ハンカチを振るから——さあ打てといふので、運送船に向つてどつと打つ、すると尻に當り横つちよに中るといふ有様、黒煙は焰々として天に沖する、實に壯觀です、敵は黒煙を吐きつゝ逃げればまた打つ、併し眞ん中に居つた白い船は逃げない、これに憤慨してこれに集中射撃を喰はした、さうするとブリツチが吹飛でしまふ、双眼鏡で見ると、丁度嫁入のときに、お嫁さんがさす簪見たやうな風に横に太砲が出てゐる、ワアツこれは軍艦らしいと思は

れた。これ正に英國の軍艦レディバード號といふ艦であります。レディバード號の艦長は負傷し、水兵は戦死するといふ有様でありましたから、その後各種の交渉をその場で行ひましたが、私は彼らに對して一言の詫言を述べて居りませんでした。内地に於ては廣田外相が卒先して詫言を入れられたといふ話であります、現地に於ては一言も申して居りません。

十、稜威は揚子江を壓して四百餘州に及ぶ

さうして南京が落ちます。丁度その日であります、河下から日本の驅逐艦があがつて参ります、勿論軍艦旗を立て、居りますから打ちはしません、信號で誰かあがつて來いと言つたら、艦長自らあがつて來ました、これは某少佐であります、で私は艦長と陸上は斯々、海上は斯々陸上は斯々と語り合つた後、泥濘の中何十里も飲まず食はずの大強行軍を續けて來た、軍艦には旨いものがあるだらう、米一舂と酒一舂をおごつてくれ、斯う云ふたら艦長は易々たるものだ、艦に歸つて後からすぐ届けるといふ約束だつた、暫くしてまた艦長が來られて、實は米はあるけれども酒はない、我慢してくれといふのである、で本當は米の方は南京米を食ふてもよいから酒の方がほしいのだが、ないとなれば已むを得ぬ、どう云ふわけかと聞くと、實は南京から河をあがつて來る途中敵の敗殘兵が鈴鳴りになつ

て——ジャンクに満載してゐる、それに英國の軍艦が護衛してゐる、南京と蕪湖の間に大蛇が象を呑んだ様に敗殘兵が充滿してゐる、その間をくねくねのぼつてゐる、その無抵抗の奴を一發づゝ喰はして揚子港の中にぶち込んだ、その喜びの餘り水兵が茶碗酒を呑んだからない、我慢してくれ、あしからず、といふ様な話だつた。でそれならよい、酒の一弁位は何でもないと云つて別れた譯でした。

爾來、南京と蕪湖との間に屯ろしてゐる敵はどの位の揚子江の藻屑となつて流されたか知りませんが、さう云ふ風にして南京は落ちました、私はそれから各種の方面に派遣されましたが、上海の郊外松江といふ所に去年の夏まで滞在したのであります。而して去年の九月ごろになりますと、漢口の攻撃が始まります。だからこれに橋本の部隊は参加しろといふ命令に接しまして、運送船に乗りまして、揚子江を遡江したのであります。日本のボン／＼汽船は無數に來て居りましてみんな日本の運輸部の旗を立て、向ふ鉢巻の兄哥連が操縦して居ります、それらの何十何百といふ船を揚子江に浮べ、葭蘆の茂る所あり、或は山迫る所の揚子江の奥地へ／＼と進んで行つたのであります。私は或る時じつと揚子江の河面を見ました、さうして考へました、この揚子江は四千年來四百餘州の人民どもを養つて來たところの揚子江である、近世になつては英國がこの四百餘州を擽取したところの揚子江、今はまた我が皇軍が威風堂々奥地へ／＼と向つて揚子江を利用して前進するといふその姿を想ふ時に、あゝ日本

も大きくなつた、時代は變つた、吾々も少し心持を大きく持たなければならぬ、この變つた時代を認識して、變つた時代に處すべく、吾々の心根を決めなければならぬと深く考へたのであります。

十一、兵 に 拜 む

さうして漢口攻撃に向けられずして、廬山の攻撃に向けられました、廬山と言へば、丁度箱根よりまだ高い山、これに赤城といふ險山を濃厚に織込んだ山であります、蒋介石の別荘地のあつたところ、さう云ふやうな山でありますから、特に一夫關に當れば萬夫も開くなしといふやうな山であります、敵はそれに十重二十重にトーチカを建設してゐる。そのトーチカは百足のやうに蜿蜒と連ねてゐる。丁度三上山に秀郷の射た百足のやうに、十重二十重にとりまいてゐる、暑さは厳しいし、食糧はなし、といふ有様で實に困難を極めたのが、昨年(一九四〇年)の百何十度といふ炎天の攻撃であります。あの有名なる、この東京の飯塚部隊長が戦死されたのもそこであります、また伊藤政喜閣下が砲弾に當つて——首つ玉をやられて怪我されたのもそこであります、非常に苦戦をした所であり、某中隊の如きは、暑さは續く、雨は降らず、食糧はなし、といふ有様で、全部の兵が血便をしたといふ實情、さうして辛ふじて山岳の一角を占つたときは、突撃のために、二百人の中隊が僅か十七人しか残つてゐ

なかつたといふ有様でした。また山の近くに行くと、手榴弾が何百何千となく飛んで来る、それが白い糸を引いて流れる、まるで白糸の瀧のやうだ、それを兵隊が瀧の下でちつと伏つてゐる、兵隊は次とやられる、實に見て居られぬといふ有様、私の砲車の如きも、敵は高きに居つて、我が部隊は低きに居るがために、一發毎に命中する、その度毎に兵に當らねばよいがと常に目を閉ちて神に祈るといつた有様、斯くの如く兵は黙々として死を賭して君國のために奮闘してゐるのであります。

この有様は先に述べました様に兵は泥人形となつて馬車を挽く、擔ぐ、押す、本當にその有様を見たら、兵に手を合せずには居られぬといふ有様であります、殊に戦死した兵の悉くが、親や妻子の手紙や寫眞をポケットに抱いて死んでゐるのであります。斯の如くして兵は自己の凡ゆる、家庭までも放棄して、命を的に君國のために奮戦してゐるのであります。私はこの戦のときはつらく感じたのであります、突撃寸前の心境は、最早力以外に何もものもないのであります、聯隊長も一兵卒も力がほしいといふのみであります。兵から見れば、銃剣術をも少し習つて置けばよかつた、もう少し射撃を稽古しておけばよかつた、といふやうなことを思ひ祈るのみであります。私から言へば、もゝ一個聯隊があれば、斯の如く兵を殺さないで済んだであらう、もう少し砲車の数が多かつたなら、こんなに苦戦せず済むであらう、といふやうなことを思ひつゞけました。また國家の機構、政治機構も經濟機構

も、力を十分に發揮するものがあつたなら、或は兵を一兵も殺さずに済むものをと考へて居つたものであります。理窟でなく死の直前に於ては唯力のみを願ふのであります。そのときの心ほど眞剣なものはありません、利害といふものは何ら頭がない、唯生命をかけたときは、政治機構も、經濟機構も、國家總力を發揮する以外何物でもないといふことを痛切に感ずるだけであります。

十二、戰場より歸つて内地を見る

内地に歸つて見ますといふと、平沼内閣は、「總親和總努力」といふスローガンを以ておやりになつてゐます、この間歌舞伎座の前を通つて見ると、「總親和大入満員」といふ（笑聲）札がかゝつて居つた。餘りにも物足らぬスローガンである、また如實に血を見てゐる將兵として、或は親や子や、兄弟や夫をと、戦地に送り、勇戦奮闘してゐるときに、國民のスローガンとしては餘りに弱くはないか。兵は血を流してゐる、吾々は戦地において仲良く突撃いたしませう、といふやうなことは絶対に申して居りません。部隊長と共に生死を共にしてゐる、またそれを必要とする現在の國際情勢である、またそれが日本の立場である。そのときにおいて、國民も政府も仲よく行きませうといふやうなスローガンをかけて居るといふことは、墮落的の日本になつて居るのであります。實に驚くにたへたり、こ

の頃歸つて見て見ますれば、世の中のこの全部が全部非合理なことばかりである、非合理を合理と考へる前に既に麻痺状態にかゝつてゐるのであります。今の總親和の如きを疑はざるが如き、また現在英國とロシアが軍事同盟を結ばんとしつゝある、その軍事同盟の内容において、これが極東問題には關知しないと英國が言ふならば、外務省は喜び腐つてゐると言ふではないか。英國は何ら關知しないと言ひ乍ら、蔣介石に武器を與へ、資金を貸與してゐるではないか、これに依つて我が忠勇なる部隊——兵隊が困つてゐるではないか、關知せぬといふことは眞つ赤な偽りであつて、關知せんとする、またしてゐるのが眞實である。實に痛憤措く能はざるものであります。命を的にかけるといふことは、富も名譽も何ものもないのであります、そのことを忘れて、恬然として英國と手を握らうとし、また英國が日本に親善であるといふことは驚くにたへたる事である。また理窟に合はぬことばかりである。例へば國民精神總動員などいふて、國民や青年を寄せ集めて、『日本は最早國際上孤立無援の立場である、だからどこからも援助を受けぬで、一人で行く決心を持たなければならぬ』と言ふて、總動員の係りの人達が、田舎に行つて説明する反面に、經濟は如何であるか、英國と手を握つて物資を買はんとし、ポンドの相場を保たんとするが如き、政府自ら關取引をやつてゐる。本當に孤立無援であるならば、本當の自給自足で行かなければならぬ、それなのに經濟の方では手を握つて關取引をしつ

ゝあるのだ。如何に國民や青年に、孤立無援だ、自給自足で行かなければならぬといつたところで、その確固たる方針を示さずして、政府自ら關取引をしてゐるやうでは、國民や青年が本當にしないのは當然である。また精神作興せぬのも當り前である。こんな不合理なことを恬として行つてゐるのが現在の社會であります。この頃の青年といつても馬鹿にはならない、二十四、五の青年になると、よく社會を見、よく認識してゐる。

十三、知らぬは國民ばかり

今度の日獨防共協定の如きどうです、日獨文化協定を結ぶなら、直ちに國民の負擔となり、血税となり、租税となるのみならず、これに判を捺すといふことに依つて、吾々は英國に立向ふことになのである、といふところに日本の偉大なる國策が決るのである、その重大なることを何ら國民に一片として教へない、だから國民は判然としない、そこで國民は國家總動員の人達が言つてゐることは何が何だか知らない——この重大なることを知らない、さう云ふやうな實情でありますから、或る時期に於て、政府がこれに協力してくれといふたときに、國民は私は知りませんといふたらどうする。しかもそれを知らねばならぬところの代議士共が、聞かんと欲せず、知らしめんと欲せず、恰かも聞

店休業の状態に居る、實に考へても驚くにたへたりです、これでは國民が向ふ所を知らないのは當り前の事である、向ふ所を知らずして、一億の國民が力を一つになつて出すといふことは毛頭出来ないので、今日この頃の日本の状態であります。これを稱して世紀未現象と申します、將にその通りであります。

私は戦争に征つて、最早勝敗の瀬戸際には命令の一つ如何にある、ぐづ／＼しては居られぬ、命令を下せば直ちに實行に移り、正々堂々と行動しなければならぬ、その職務を一年七ヶ月やつたのであります、翻つて日本に歸つて見ると如何です、實に慨嘆にたへない有様であります。

十四、國策の未決定は兵を戰場に曝物にすることだ

また申します、ドイツと軍事協定を結ぶことが支那事變を解決する一助にもなるとせるならば、なぜ早く締結しないのか、この内閣成立以來今日に至る數ヶ月を、五相會議、五相會議といつて暮して居ります。もしこれが支那問題の解決の一助になるとするならば、この何ヶ月間に亘る五相會議といふものは、我が忠勇なる兵を炎天の下、或は雨露の下、數ヶ月支那の荒野にさらしたといふ結果になる。また日本の戦時状態を數ヶ月延ばしたといふ結果になる、將兵が死んで、血が流れるといふこと

を考へるならば、この軍事協定の如き直ちに結ぶといふ策がなくして、何として兵隊に相濟みますか、この事を戦地に向つて訴へるならば如何になるでせうか、實に不幸の極と私は思ひます。

この重大なる危機を切抜けやうとするには、餘りにもこの世界情勢に比べて、日本は國民と言はず政府と言はず、全部低調過ぎます。もし積極的に日本でなければ、この難局の切抜けは出来ません。唯昔から日本精神が、大和魂があるなど、言ふて安心して居るが如き、支那の兵は相當強いです、日本で考へてゐるやうな弱兵ではありません、四月攻勢とか、何々攻勢とか、とにかく我無敵皇軍に双方向つて来る。

また蔣介石の威令は行はれて居ります。

十五、駐兵の苦樂

斯の如くして私共は數回の惡戰苦闘に依つて廬山を陥れました。それから隘口街を占り、徳安をとり、修水河の敵を追ひ散らしたのであります、敵は悉く南昌に向つて逃げました。今修水河を渡つて行くならば南昌は直ちに占れるといふ去年の暮の状態でありましたが、翻つて我が兵を見れば、もう青物を食はざること數ヶ月、炎天の山で戦ひに暮れ、戦ひに明けた結果、色は眞つ黒になつてゐるけ

れども、榮養が不十分のために生色がないのであります。そこでそこに駐屯するといふことになりました。駐屯と云へばそこで樂にやつて居るかと言へばさうではありません、何にもない荒蕪地の駐屯であります、ですから薬をもつて来て薬小屋を拵へて家を作り、その上に天幕を張るといふ有様です。その兵士村に翻繻として日章旗が翻つてゐる、これが冬の日でありますから、黄金色を呈する、日本の神武御東征がこの有様ではなかつたかと思はれます、而して厩を作り、釜竈を作り、炭焼小屋、炭焼釜を作るといふ有様で駐屯したのであります。駐屯中に兵の喜びといふものは、家族よりの手紙であります、數ヶ月遅れの何千本の手紙が中隊本部に届けられる、それを兵は自分の所に來て居ないかと探して探して、漸く一本の手紙を受取つたときの、兵の喜ぶ姿は形容詞すらない程の喜び方である、さうして彈丸の中をくぐり、泥田の中を馳け廻つたその苦勞といふものが、その一本の手紙に依つて、流されてしまふのであります。負傷してゐる兵も、手紙一本に依つて、傷の痛さも辛さも忘れてしまふといふが如き、實に可愛い無邪氣の兵であります、黙々としてさうして活動してゐる可愛い兵であります。

十六、英靈に誓ふ

私は斯の如くして駐屯をいたしまして、今年の三月廿日いよいよ南昌を攻撃するといふことになりました。これがためには修水河を渡る外はない、その間には無数のトーチカがある、でありますからして、ありと有ゆる今事變以來初めてといつてもよい位に、太砲を集めて天地も轟けとばかり打つて打つて、打ちまくつたのであります。その砲撃の最中に私の次の部隊長が参りましたので、私は交代したのであります。で私は一切を同部隊長に譲つて、兵と修水河の邊りに別れを告げて歸つたのであります。今年の一月以來未だ會てない所の泥濘その極に達した修水河の邊り雨は蕭々と降りしきり、砲撃は將に熾烈といふ最中に私は兵に別れを告げて歸つたのであります。生死を誓つた兵に別れを告げて——ぬかるみの中に残して私のみ一人歸るといふ悲しみは未だ味はざるものであります。私はこの間一年七ヶ月、多數の忠勇なる部下を失ひまして、その戦死した兵を遺骨にして、雨の降る中に祭壇を設け慰靈祭を行ひました。そのときに私は斯う申しました、「お前は死ぬる前に一ぺん青物を食ふことが出来たならいつ戦死してもいゝといふたじやないか、その言ふたお前が英靈となつて、今青物を捧げる部隊長の悲しみを知つて呉れ」と祭文で申しました、祭文の一番末尾に「諸士の死は東亞建設の礎となつた、以て冥すべし」と結びました。またその遺族に向つて「淋しいでせう、併し乍らあなたの夫は、伴は、東亞建設の礎となつたのである」と言ふて慰めたものであります。私のみ

ならずどの中隊長も、大隊長も、聯隊長もさう申したでせう、内地の慰靈祭でも、現地の慰靈祭でも、みな同じやうに東亞建設の礎だ、以て冥すべしと言つたでせう、私はこの戦場におけるところの拜むが如き兵、その兵に代り、またその英靈、その遺家族に代つて是非ともこれに酬ゆるべく、この支那事變は實に完全無敵に片附けるのが吾々國民の任務であらうと私は考へるのであります。もしそれこの事が旨く行かぬやうなことがあつたとするならば、如何なるところに如何なる事件が勃發するや測り知らざるものがあると思ふのであります。否斯くあると私は斷言いたします。

十七、獨伊と軍事同盟を結べ

さて私は日本に歸つて見ますれば、日獨軍事協定といふものが問題になつてゐる——これを結ぶの結ばぬの、或は結ぶと閣議が纏つたなど、も申されますが、大體これは支那事變を片附けるがために、速かに軍事同盟を結んで行き、以て英國を撃攘するのにいゝチャンスだと思ひます。このチャンスを逸しては蔣介石は容易に倒れはしない、彼には自己軍隊の所謂優秀なる部隊を持つて、防禦正面の狭い所、狭い所と見つけて行くので、だん／＼と強くなつて来る、時間の經つに連れて英國はバウンドの注射をする、武器の注射をするといふ有様ですから、とても倒れつこはない。でありますから、こ

れが背後にあつて陰に陽に援助しつゝある英國とロシアを倒さなければならぬのであります。然らばソヴェートを叩き出し、英國を叩き出すにはどうしたらよいかといふと、ソヴェートは何物も持つて居らず、一つとして見るべきものはない赤化々々といふが、或は過言かも知りませんが、ロシアの赤化は一つの道樂なやうなものであります、ところが、英國になると、金そのものを持つてゐるのみならず、支那より手を引くといふことは、次いで印度を手離しすることになる、印度を離すといふことになれば、世界の十等國に下るに等しいそれを英國はよく知つてゐるだけに、蔣介石の尻押をするに眞剣である、だからこの英國を叩き出さねばならないのであります。

十八、英靈に報ゆる道

自分を攻めて來られないが爲にそんなものを一々信用して居つたらいけません。斷然此の英國を叩き出さなければいかんと思ひます。此時に於て日獨伊軍事同盟を結んで、之を獨伊側に利用させるのではなくて、此方が之を利用して天津、上海を抑へ更に南へ南へと進んで行くのが、現在の我國の國策として採るべき策ではないかと思ひます。それをやる爲には飽迄自給自足の肚を決め、又此の自給自足し得るやうな政治、經濟體系に國家を總體的に持つて行くと云ふ事は必要であると思ふのであり

ます。唯此日獨伊軍事協定問題を繞り、英國にもつかん、獨逸、伊太利側にもつかんで宙ぶらりんの態度で洞が峠を決めると云ふ考を持つて居る方が政治家の中にも随分あります。國家主義である獨逸、伊太利、自由主義である英國、佛蘭西、今や世界は思想的に二分裂して何れが勝つかとことん迄行くのであります。其の真中にあつて何方つかずでじつとして居れば、獨逸が英國側を征服したとしても其の曉に於ては翻つて獨逸、伊太利が日本を攻撃に来るのは當り前であります。

今や、ツツリニ、ヒットラーは仁義を以て外交交渉を結んで居る、日本も其の端くれに入つて居るならば仁義を以てチャントやつたら宜しい洞が峠はいかん、ルーマニア、チェツコと云ふやうな小國ではない。しつかり肚を決めて仁義を以てやるのが私は一番宜いのではないか、而して之が又支那問題を解決する所以であり、更に之は義の爲に殫れた幾萬の英靈に對して酬いる所以であると思ひます。私は斯く考へ信ずるのであります。

之を要しまするに私は兵の爲に英靈の爲にもう少し政治家も國民も眞劍になつて考ふるならば、此の末世紀的現象、考と云ふものは立所に吹き飛ばされて了ふのではないかと存じます。戦地より歸りました處の頭を以て斯く痛感する次第であります。私の講演は之で終りであります。(拍手)

本日の本行の途＝定價十錢

昭和十四年七月二十日印刷
昭和十四年七月廿八日發行

著者 橋本欣五郎

發行者兼印刷者 古屋恒助

東京市神田區神保町三ノ二三

發行所 富強日本協會

電話九段(33)三二二七番
板橋東京一一五二一七番

390

357

終

徵兵保險

富國徵兵

出世保險

谷比日 京東 社本